

八戸における安藤昌益研究の現況

稲葉 克夫

安藤昌益についての研究は、戦後俄かに盛んになり、学界でも地元でもたゆみなくつづけられて今日に至っている。先ず写本について見ると、先達で「図書新聞」を賑わした奈良本教授の京大本と尾藤教授の慶大本の原本問題は未だ確定していないし、最近立命館大学の師岡佑行氏による八戸本の調査結果も、期待外れに終つたようである。即ち、師岡氏は八戸図書館蔵のマイクを照合して帰つたが、これは結局、八戸本は慶大本の写しと判定され、やはり、目下のところ行方不明の渡辺大壽蔵の原本を採さなければ論争の決め手が得られないということになつた。ちなみにいうと『概説八戸の歴史中1』所載の『統道真伝』表紙写真は、慶大本でも京大本でもない、原本の写真である。渡辺本が今、どこにあるかは一部関係者のみが知っているにすぎない。

次に昌益の学統についてであるが、一時、頌国の禁止を犯して外国に行つたという想像もなされ、近年も、金時習、除政徳ら朝鮮美学派と昌益の関係が研究されているが、何れも昌益が自らのべた「師の教へを得て之を知るに非ず」というオリジナリティーを打ち破る決定打にはならず、いたずらに彼の周辺、たとえば「盲心経と言経の周辺—安藤昌益をめぐる八戸藩建設期の文化—」といった類の推理がなされ、隔靴搔痒の感を抱かざるを得ないも

のだつた。

しかし八戸市立図書館の西村嘉氏は、具体的に昌益の学統に想定される要検討人物として増穂残口をあげた。残口は一六五五—一七四二、つまり藩政確立期に切支丹文化の影響濃い豊後大分に生まれ、元禄文化の中心、京阪で活躍した。民間で通俗的な講談を行い、門下に有力な町人などが集まつた。一七一五（正徳五）年の『詭道通達』そのほか『残口八部書』とよばれる八部の著作を刊行した。偏激的な家族道徳を排斥し、結婚は必ず男女の愛情を基礎としなければならぬことを力説し、庶民的家族道徳を神道理論の形で強調している。江戸時代前期の神道家である。（河出書房新社刊、日本歴史大辞典17）

残口と昌益のつながりについて、最初注目したのは、八戸の昌益研究才一人者の野田建次郎氏である。氏は『八戸の歴史中1』の「安藤昌益と彼をめぐる人々」の章でまず昌益の八戸在住を確認し出生その他についての手固い実証の中からも、借屋住まいでないから相当土着した生活をしていただろうと推定し、ついで神山仙庵、高橋大和守、中居伊勢守らの門人を統つている。

この高橋大和守正方の項において、野田氏は増穂残口を紹介した。同書九十六頁を引用してみよう。「高橋大和守正方、初め式大夫、享保十二年（一七二七）四月白山宮の神主となつた。享保十六年（一七三一）京都へ上り、吉田家より大和守に任ぜられ、白山宮は正一位の神階を受けた。この時、洛東神明宮大宮司増穂大和守竣仲（増穂残口）に白山縁起を書いてもらつた。残口この時七十七歳である。増穂残口は先に八戸に在り、祖父の高橋大和守正久と親しく、八戸にいた時に白山縁起を書いたとあるが、

元祿十六歳次癸未正月上院吉辰、禊士待曉翁敏誌とある白山縁起一巻があるが、これが後の残口かも知れない。(略)昌益との思想上の關係については、渡辺大壽氏もあるいはとの考えがあられた。」

また、同書百頁には中居伊勢守についてのべ「中居伊勢守藤原幸通、初め彦太夫といひ、享保十四年(一七二九)神明宮社人となる。その時までは父則直が社守で修験の宗門にはいつていたが、すべてこの年神道の法に改めた。(略)享保十九年(一七三四)三月京都へ行き神明祠官中居伊勢守を拜領、寛延元年(一七四八)九月京都へ行き十八倅道の伝受を受け、子の彦太夫は日向守(在官)に補任した。宝暦八年(一七五八)七月五日に社人支配頭となつた。」

以上の考察から、容易に△増穂残口―八戸白山宮―高橋大和守正久―高橋大和守正方―安藤昌益―中居伊勢守幸通―八戸神明宮―洛東神明宮―増穂残口▽という想定がなしえよう。

昌益の人物像についていわれる一つの特色にY談が多いということがある。もちろん単に卑猥なものでなく、疑氏的な生命力に溢れた内容のものといわれるが、増穂残口の『範道通彥』の影響が昌益の語り口に何らかの影響があるともいえよう。

なお高橋大和守の子孫は八戸で健在であり、そう遠くない日に昌益資料の探索が行われるのではなからうか。

また昌益は弟子達に文雄(ぶんゆう)の『韻鏡律正』を教科書としては更用したが、文雄との關係について何ら研究がされていない。文雄は昌益と同年代の人間である。生年は一七〇〇(元祿十三年)、没年一七六三(宝暦十三)年、一四歳で京都の寺に入

り、のち江戸で仏典を研究し、太宰春台に唐音を学び、二七歳以後京坂などの寺にあり、講話、著述に努め、一七四四(延享元)年の『摩光韻鏡』はのちの研究に与えた感化が大きい。『和字大観抄』はかなづかいを論じ、そのかな台字説は早く現われた国字改良説の一つ。未、既刊書五〇余部。(河出書房新社刊「日本歴史大辞典」)

安藤昌益の文体には独得のものがあつて、造字も特異であるが、単に東北人の感覚というのでなく、文雄の理論を取り入れた結果ではなからうか。この点については八戸の研究家の間で早くから指摘されていたが、中央史家の今後の研究によらざるを得ないとしている。また、仏教の文雄にせよ、神道の増穂残口にせよ共に啓蒙家だつたことは注目に値しよう。

昌益の娘のうちの一人はこの地方の医家に嫁いだものとみられているが、その家についても見当がつけられ、調査のリストにあがつている。前の高橋家とともに、もしも資料が残っているならば昌益研究は飛躍的に進歩するだろうと考えられる。なお、八戸の郊外、八幡の旧家からは昌益らのグループの寄せ書が発見され、珍しい昌益の短歌がある。これも西村氏の功績である。

また『自然真営道』は一般に百巻九十三冊と称せられ、関東大震災で十五冊を残して焼失したといわれるが、八戸の研究家たちの間では、野田氏もいわれる如く二、三百冊もあつたようで、

『自然真営道』とは、特定の百巻九十三冊に限つたものでなく、バルザックの『人間喜劇』的な名称で、そのうち、神山仙庵がまとめたものが定説のそれではないかと考えられている。現在、昌益の筆蹟というものは非常に少なく、殆ど仙庵の筆蹟である。要

するに昌益は色々と言いたがそれをまとめて出版する準備がなかつた。それを神山仙庵が体系づけようとして百卷九十三冊その他に分類したとみている。

安藤昌益文獻は、殆ど八戸地方史の指導者、上杉修氏が所蔵しているが、先年、図書目録の一部を公開したので八戸図書館がその才一集を公刊した。目録をあげると次のようである。

- 1 自然真當道 甘味諸桑自然之氣行
- 2 稿本自然真當道 才九・十、私法仰書卷
- 3 自然真當道和訓
- 4 餘穴参伍的法 立菴宗巴述
- 5 泰西流量地測量等 卷之二 神山由助
- 6 泰西流量地測量算術 神山由助
- 7 表題無し 昌益述仙庵写
- 8 博聞拔粹之采 昌益著仙庵写
- 9 博聞拔粹沢氏扁 ” ”
- 10 松真敬会祭文 仙庵写
- 11 香大意上 昌益述仙庵写
- 12 香之大意中位下 昌益述仙庵写
- 13 確龍先生讀経普一 昌益述仙庵写
- 14 萬賦卿木虫惟弁 ” ”

これらは自然真當道の稿本・刊本の何れにも入っていないものである。この中で特に重要視されているのは「松真敬会祭文」である。野田氏はこれについて研究発表をしているがこの門弟グループの存在、活動が明らかになるにつれて、殆ど継承がなされていないように思われた昌益の思想が根強く生きていることを

知るのである。

八戸の安藤昌益研究は、上杉・野田両氏を中心に行われ、ほかに中里進氏や西村嘉氏、その他若干の若手も存在している。そして、大抵の地方史が中央史家のエビゴーン化や下請け的立場にあるのにならして、八戸の安藤昌益研究は中央から非常なる期待と尊敬をうけている。上杉・野田両氏の手による昌益研究も速くない日にやがて公刊されるだろうが、一日も早くんことを祈念して八戸の報告を終える。